

塩田千春展：魂がふるえる

2019年6月20日(木)ー10月27日(日) 森美術館(六本木ヒルズ森タワー53階)

塩田千春の全貌を明らかにする、過去最大で最も網羅的な個展

森美術館は、2019年6月20日(木)から10月27日(日)まで、「塩田千春展：魂がふるえる」を開催します。ベルリンを拠点にグローバルな活躍をする塩田千春は、記憶、不安、夢、沈黙など、かたちの無いものを表現したパフォーマンスやインスタレーションで知られています。しばしば個人的な体験を出発点にしながらも、その作品はアイデンティティ、境界、存在といった普遍的な概念を問うことで世界の幅広い人々を惹きつけてきました。なかでも黒や赤の糸を空間全体に張り巡らせた圧倒的なインスタレーションは、彼女の代表的なシリーズとなっています。

本展は、塩田千春の過去最大規模の個展です。副題の「魂がふるえる」には、言葉にならない感情によって震えている心の動きを、他者にも伝えたいという作家の思いが込められています。大規模なインスタレーション6点を中心に、立体作品、パフォーマンス映像、写真、ドローイング、舞台美術の関連資料などを加え、20年にわたる活動を網羅的に体験できる初めての機会になります。「不在のなかの存在」を一貫して追究してきた塩田の集大成となる本展を通して、生きることの意味や人生の旅路、魂の機微を実感していただけることでしょう。



《不確かな旅》

2016年

鉄枠、赤毛糸

展示風景：「不確かな旅」ブレイン | サザン(ベルリン)2016年

撮影：Christian Glaeser

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 津原、田ヶ谷、伊藤

Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22 同和ビル

本展の特徴

■ 塩田千春の過去最大、最も網羅的な個展

世界各地で精力的に作品を発表している塩田千春は、美術館、国際展、ギャラリーなどで、これまでに250本以上の展覧会に参加しており、近年では年間20本前後の展覧会に参加するなど、国際的にも高い評価を得ています。日本では2001年の第1回横浜トリエンナーレに出展した《皮膚からの記憶》にて注目を集め、2008年には国立国際美術館（大阪）で「精神の呼吸」、2012年に丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（香川）で「私たちの行方」、2013年に高知県立美術館で「ありがとうの手紙」など数々の個展を開催。2015年には第56回ベネチア・ビエンナーレ国際美術展（イタリア）の日本館代表として《掌の鍵》を展示しました。

本展は、1990年代の初期作品やパフォーマンスの記録から、代表的なインスタレーション、最新作までを網羅的に紹介する、過去最大規模の個展となります。

■ 大規模な没入型^{イマーシブ}インスタレーション

塩田千春の20数年にわたる実践のなかで、彼女の作品を最も特徴づけるのは黒や赤の糸を空間全体に張り巡らせる没入型のインスタレーションです。観客は糸が張り巡らされた空間の中を歩きながら、目に見えない繋がりや、記憶、不安、夢、沈黙などかたちの無いものを体感的、視覚的に意識させられます。糸の色について塩田は、黒は夜空とも宇宙とも捉えることができ、赤は血液、あるいは「赤い糸」といった、人と人の繋がりとも考えることもできると言っています。

本展では、移動や旅を連想させる舟やトランク、沈黙を示唆する焼けたピアノなどが組み合わせられた、没入型インスタレーションを展示します。

■ 「不在のなかの存在」、魂や生きる意味を考える新作

「不在のなかの存在」をテーマに作品を制作してきた塩田千春は、記憶や夢のなかだけに存在する、物理的には存在しないものの気配やエネルギーなどにかたちを与えてきました。塩田は自身の身体と作品を分かちがたい一体のものとして捉えています。初期のパフォーマンス以降、自身が演じた限られた映像作品を除けば、身体が作品に現れて来なかったのは、そこに「不在のなかの存在」を意識させるためでもあるでしょう。

しかし、一昨年に癌の再発を告げられ、病院の治療プロセスに機械的に従う時間のなか、「魂はどこにあるのか」という問いが浮かんだといいます。その過程で、身体がばらばらになるような感覚に襲われた塩田は、壊れた人形のパーツばかりを集め、再び自身の手足を鑄造した作品を作りはじめました。本展のための新作インスタレーションでは、身体の断片が糸で繋がられ、観る者に魂や生きる意味を問いかけます。

■ 初期作品からの発展と一貫性を迎えるアーカイブ展示

塩田千春は京都精華大学では絵画を専攻しましたが、1993年から1994年のオーストラリア国立大学留学中にはすでに、《One Line（一本の線）》という並行線のみの大規模なドローイングや、空間に「絵を描くように」糸を張った作品も制作しています。また同時期には、「絵のなかに自分が入っている夢をみた」ことをきっかけに、身体に絵具を塗り、シーツを使ったパフォーマンス《Becoming Painting（絵画になる）》も実施しました。その後ドイツに留学した塩田は、本格的に身体を使ったパフォーマンスを始め、以降ベルリンを拠点にさまざまな試みを続けてきました。

本展のアーカイブ展示では、初期のドローイングから、インスタレーションやパフォーマンスの記録を通して、彼女の実践の発展とそこに通底する一貫性を辿ります。

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：津原、田ヶ谷、伊藤
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp
〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22 同和ビル

■ 舞台美術の仕事に関する資料展示

塩田千春は、2003年にウヤズドフスキ城現代美術センター（ポーランド、ワルシャワ）で発表された「オール・ア・ローン」（可世木祐子演出）以降、ダンスやオペラなど数々のステージデザインに携わってきました。ドイツでは、キール歌劇場で上演された「トリスタンとイゾルデ」（2014年）、「ジークフリート」（2017年）、「神々の黄昏」（2018年）などのワーグナー作品。国内では、岡田利規演出による「タトゥー」（2009年、新国立劇場）や、サシャ・ヴァルツ監督、細川俊夫が音楽を手掛けた、2011年初演のオペラ「松風」（2018年、新国立劇場）*などの作品があります。

塩田の空間芸術が舞台公演とどのように関係づけられ、いかに活かされてきたのか。本展では、記録映像や模型を通してその様子を再現します。

*オペラ「松風」は、モネ劇場（ベルギー、ブリュッセル）で初演されて以降、ベルリン国立歌劇場（ドイツ）、ポーランド国立歌劇場（ワルシャワ）、ルクセンブルク歌劇場でも公演されました。

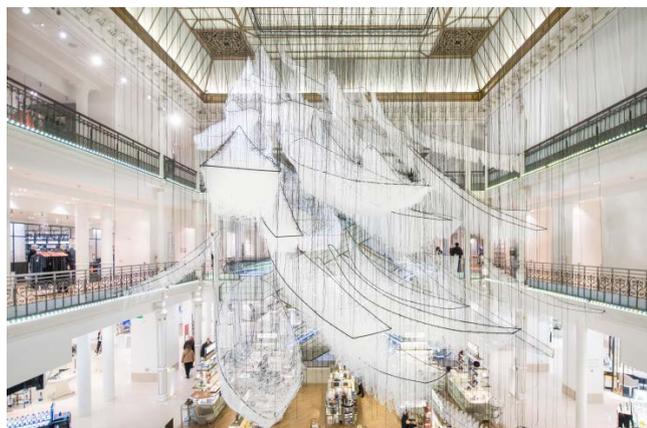


オペラ公演「松風」のステージデザイン
ベルリン国立歌劇場、2011年
撮影：Bernd Uhlig

主な展示作品

《どこへ向かって》

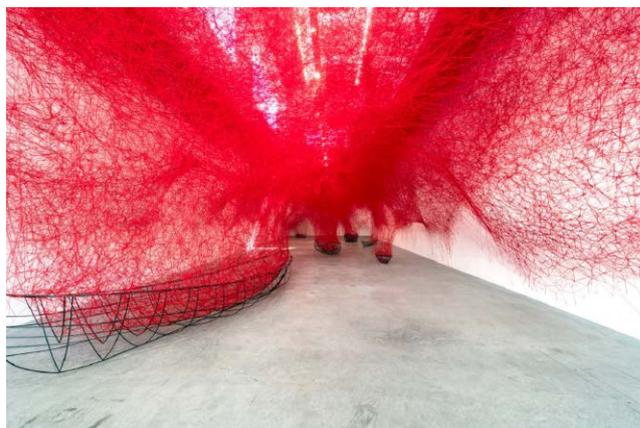
舟は塩田千春の作品に頻繁に使われるモチーフのひとつです。大海に浮かぶ小舟のように、それは先の見えない未来や人生などを連想させます。高さ11メートルの天井から吊られた約100艘の舟は、美術館の入口で観客を出迎え、展覧会という旅へと誘います。



《どこへ向かって》 2017年 白毛糸、ワイヤー、ロープ
展示風景：「どこへ向かって」ル・ボン・マルシェ（パリ）2017年
撮影：Gabriel de la Chapelle

《不確かな旅》

会場に入って最初のインスタレーションは、真っ赤な糸で覆われた空間に、フレームだけの舟が配された作品です。2015年のベネチア・ビエンナーレ日本館での展示では、古いベネチアの伝統的な舟の上部に、夥しい数の鍵が吊られていましたが、《不確かな旅》では舟はより抽象化され、赤い糸で埋め尽くされた空間は、不確かな旅の先にある多くの出会いを示唆しているかのようです。



《不確かな旅》 2016年 鉄枠、赤毛糸
展示風景：「不確かな旅」プレイン | サザン（ベルリン）2016年
撮影：Christian Glaeser

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局（共同ピーアール内）：津原、田ヶ谷、伊藤
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp
〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22 同和ビル

《静けさの中で》

幼少期に隣家が夜中に火事で燃えた記憶から制作されたインスタレーション。燃えたグランドピアノと観客用の椅子が、黒い糸で空間ごと埋め尽くされる作品です。音の出ないピアノは沈黙を象徴しながらも、視覚的な音楽を奏でます。



《静けさの中で》 2008年 焼けたピアノ、焼けた椅子、黒毛糸
展示風景:「存在様態」バスクアートセンター(スイス、ビール/ビエンヌ)2008年
撮影: Sunhi Mang

《時空の反射》

身体を覆う皮膚のように、ドレスは自身の内部と外部の境界を象徴します。そのドレスが黒い糸で埋め尽くされた空間に浮かぶことで、不在の存在を感じさせます。また、鉄枠に囲まれた空間を半分仕切る鏡の両側にドレスが吊られていることで、虚像として鏡に映るドレスと反対側の空間に実際に在るドレスが、観る者の意識のなかで混在します。



《時空の反射》 2018年 白いドレス、鏡、鉄枠 所蔵:アルカンターラ
展示風景:「時間を巡る9つの旅」バラツォ・レアーレ(ミラノ)2018年
撮影: Sunhi Mang

《内と外》

1996年にドイツに移住し、現在はベルリンを拠点とする塩田千春は、ベルリンの壁が崩壊してから15年目の2004年頃から、窓を使った作品を制作し始めました。当時ベルリンでは再開発が進み、多くの建物が取り壊されてゆくなか、塩田は廃棄された窓枠を集めて歩きました。窓はプライベートな空間の内と外の境界として存在しますが、東西ドイツを分断した壁も連想させます。本展で展示する《内と外》は2009年から制作され、いくつかのバージョンがありますが、今回は約250から300枚の窓枠が使われた作品を展示します。



《内と外》 2009年 古い木製の窓、椅子
展示風景: Hofmann・コレクション(ベルリン)2009年
撮影: Sunhi Mang

《集積—目的地を求めて》

展覧会の最後を飾るインスタレーション《集積—目的地を求めて》は、約400個のスーツケースが振動し続ける作品です。塩田がベルリンで見つけたスーツケースの中に、過去の新聞を発見したことが制作のきっかけとなっています。あらゆる物はそれぞれの記憶を内包していますが、ここではスーツケースが見知らぬ人の記憶、移動や移住、あるいは難民として定住先を求める旅など、人々の人生の旅路そのものを示唆しているようでもあります。



《集積—目的地を求めて》 2016年 スーツケース、モーター、赤ロープ
展示風景:「アート・アンリミテッド」アートバーゼル(スイス)2016年
Courtesy: Galerie Templon 撮影: Atelier Chiharu Shiota

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 津原、田ヶ谷、伊藤
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp
〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22 同和ビル

開催概要

展覧会名: 塩田千春展:魂がふるえる

主催: 森美術館

企画: 片岡真実(森美術館副館長 兼 チーフ・キュレーター)

会期: 2019年6月20日(木)ー10月27日(日)

会場: 森美術館(東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー53階)

開館時間: 10:00-22:00(火曜日のみ17:00まで)

* 入館は閉館時間の30分前まで * 会期中無休

入館料: 一般1,800円、学生(高校・大学生)1,200円、子供(4歳ー中学生)600円、シニア(65歳以上)1,500円

* 表示料金に消費税込 * 本展のチケットで展望台 東京シティビューにも入館可(スカイデッキを除く)

* スカイデッキへは別途料金がかかります

一般のお問い合わせ: Tel: 03-5777-8600(ハローダイヤル) 森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum

塩田千春 略歴

1972年大阪府生まれ、ベルリン在住。2008年、芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。南オーストラリア美術館(2018年)、ヨークシャー彫刻公園(2018年)、スミソニアン博物館アーサー・M・サックラー・ギャラリー(2014年)、高知県立美術館(2013年)、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(2012年)、国立国際美術館(2008年)を含む世界各地での個展のほか、シドニー・ビエンナーレ(2016年)、キエフ国際現代美術ビエンナーレ(2012年)、横浜トリエンナーレ(2001年)など国際展参加も多数。2015年には第56回ベネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館代表。

作家メッセージ

今まで、展覧会が好きでそれだけが生きがいで、作品を作ってきました。どうにもならない心の葛藤や言葉では伝えることができない感情、説明のつかない私の存在、そのような心が形になったのが私の作品です。一昨年、12年前の癌が再発しましたが、死と寄り沿いながらの辛い治療も、良い作品を作るための試練なのかもしれないと考えました。この展覧会では、過去20年間分の作品を発表します。裸になった私の魂との対話を観てください。

塩田千春



撮影: Sunhi Mang

最新のプレス画像は、下記サイトより申請、ダウンロードいただけます。

<http://bit.ly/2TGN969>

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 津原、田ヶ谷、伊藤
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp
〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22 同和ビル

関連情報

GINZA SIXにも、塩田千春の作品が登場

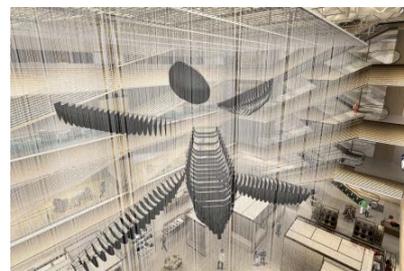
2019年2月27日(水)より、GINZA SIXの吹き抜け空間に、塩田千春による新作インスタレーション《6つの船》が登場します。

戦後多くの困難を乗り越えて復興を遂げてきた銀座の「記憶の海」を、6隻の船が出航し前進する様子を表現した新作となります。空間全体に張り巡らせた白い糸によって吊り下げられた6隻の船は、異なる高さや向きで配置されているため、各フロアから見え隠れする船を眺めながら、ふと異次元を訪れるような想像の旅をお楽しみいただけることでしょう。

展示期間：2019年2月27日(水)～10月31日(木)予定

展示場所：GINZA SIX 中央吹き抜け(東京都中央区銀座 6-10-1)

詳細：<https://ginza6.tokyo/art>



イメージ図

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 津原、田ヶ谷、伊藤
Tel: 03-3571-5258 Fax: 03-3574-0316 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp
〒104-8158 東京都中央区銀座7-2-22 同和ビル